

〈フォーラム〉

「日本語 = タミル語同系説」を検証する

——大野晋『日本語の起源 新版』をめぐって

家 本 太 郎
児 玉 望
山 下 博 司
長 田 俊 樹

0. 序

長田俊樹

日本語はどのようにして形成されたのか。日本語の起源はどこか。こうした問題に若いときから取り組んできた大野晋教授の『日本語の起源 新版』が1994年6月に岩波新書として出版された。1957年に旧版の『日本語の起源』が出版されてから、じつに37年の年月がたつての刊行である。大野教授の「日本語 = タミル語同系説」は1980年に『日本語の世界 1 日本語の成立』（中央公論社）で公にされてからマスコミに大々的に取り上げられたので、その是非はともかくとしてよく知れわたっている。その当時から新版をだすのは時間の問題と考えられていたが、大野教授の努力にもかかわらず、否定的な意見がおおく、今日まで旧版の改訂版は刊行されなかった。しかし、吉野ヶ里遺跡から南インドでの出土品とよく似た甕棺が大量に出土したことや、朝鮮語とタミル語との対応語を考えることによって、日本文化と朝鮮文化の類似性を説明するなど新たな状況証拠をあげてまとめたのがこの新版である。

しかしながら、この新版の出版にあたっての学会の反響はまったくなかった。大野説がはじめてあきらかにされた1980年ころの反応とはうってかわった静けさである。そこで、大野教授を直接お招きして、1995年6月23日に国際日本文化研究センターで『日本語の起源について—大野晋教授のタミル語起源説をめぐって—』と題してシンポジウムを行った。とくに、これまでまったく触れられなかったドラヴィダ語研究者の立場から大野説を検証することを目的とし、大野説が最初に発表された当時はまだ学生だった、若きドラヴィダ研究者に参加していただいた。

では、その参加者を紹介しておこう。家本氏は京都大学で言語学を学んだ後、文部省の派遣留学生としてインドのマイソール大学に留学、現在は京都大学留学生センターで日本語を教えておられる。専門はドラヴィダ語族のタミル語、カンナダ語で、三省堂『言語学大辞典』のドラヴィダ諸語の記述はほとんど家本氏の手によるものである。児玉氏は東京大学で

言語学を学んだ後、家本氏と同じ文部省派遣留学生としてインドのハイデラーバード大学でドラヴィダ語族のテルグ語を学び、現在は熊本大学で言語学と日本語を教えておられる。お二人とも30代半ばの新進気鋭の言語学者である。さらに家本氏と児玉氏にくわえ、東北大学の山下博司氏にも参加していただいた。山下氏は言語学を専門としないが、タミル研究の中心地であるマドラス大学に留学し博士号を取得し、サンスクリット語や古典タミル語ばかりでなく、現代タミル語についても通訳をこなすほど流暢なタミル語を話す、いわば日本で一番タミル語ができる研究者で、大野説をタミル語研究の側から検証できる貴重な人材である。

シンポジウムでは、すでに朝日新聞（大阪版）に紹介されたように、大野教授とわれわれ若手研究者の議論はかみあったとはいえ、誤解を恐れずにいうならば、当日の議論では大野教授に軍配が上がったと認めざるをえない。しかしながら、それはわれわれ四名が大野説を承認したことを意味しないということは強調しておきたい。あえていうならば、大野教授に「日本語＝タミル語同系説」を撤回させることができなかったという意味において敗北したにすぎない。どの点がかみあわなかったのか、シンポジウムを振り返って、述べておきたい。

シンポジウムではまず参加者の自己紹介が行われた後、長田が「大野説をドラヴィダ言語学の立場から検証する」というシンポジウムの趣旨説明を行った。趣旨説明に際し、われわれ四人が大野説にはどちらかといえば否定的であること、とくに紀元前7C—2Cにかけて、タミル人が直接日本へやってきてタミル語を伝えたとする「タミル語伝播説」については、考古学や形質人類学の立場からまったく可能性がないことを強調した（詳細は4。長田論文参照）。ただし、このシンポジウムでは考古学や形質人類学に関連する話はなるべくせず、言語学を中心として討議することを主目的とすることを述べて趣旨説明を終えた。

つぎに、家本氏が発表を行った（詳細は1。家本論文を参照）。家本氏はタミル語と日本語の文法構造の相違点を指摘し、もし大野説にしたがうならばこうした相違点をどう説明するのかという点にしばって、大野教授にいどんだ。とくに、すでにドラヴィダ言語学でコンセンサスを得られた術語や文法範疇を無視して、日本語の記述に使われる助詞や助動詞といった用語を使用すると、タミル語の接辞や連続動詞とは概念上、かならずしも一致しないことを指摘した。また、大野教授が日本語とタミル語の対応語としてあげた単語のなかにはあきらかにサンスクリット語からの借用語があることも家本氏は指摘した。

家本氏に続いて、児玉氏が発表を行った（詳細は2。児玉論文参照）。児玉氏は大野教授があげた音対応をとりあげ、日本語・タミル語共通祖語（日・タ祖語）からの音変化が想定されていない点を指摘し、比較言語学の立場からいえば、この音対応だけでは不十分であることを指摘した。たとえば、タミル語の一つの音に日本語の二つの音が対応する例をあげ、この場合日・タ祖語では二つの音であったのか、一つの音であったのかをあきらかにすることと、日・タ祖語で二つであるとするならば、タミル語で一つになった（これを言語学では融合と呼ぶ）痕跡を示すべきだし、日・タ祖語で一つならば日本語で二つになった（これを言語学では分裂と呼ぶ）条件を示すべきだと大野教授にせまった。

家本・児玉両氏の発表の後、大野教授が発表を行った。大野教授の発表要旨は自著『日本

語の起源 新版』(岩波新書)で展開されたものとほぼ同じで、この本をめぐるシンポジウムにわざわざ本と同じことを繰り返されたのが印象的であった。大野教授の発表後、休憩を取り、山折哲雄国際日本文化研究センター教授の司会による討論にはいった。討論の冒頭、二人のコメンテーターがコメントを述べた。まずさいしょに、サンムガダス氏に発表していただいたが、大野教授の「日本語＝タミル語同系説」とは直接関係がなく、このシンポジウムへの参加を大野教授がとくに望んだ理由がわれわれには理解できなかった。

もう一人のコメンテーターとして、山下氏がコメントを述べた(詳細は3。山下論文を参照)。山下氏は豊富なタミル語の知識から、大野教授が同系とみる助詞がタミル語と日本語できちっと対応していないことやその他の対応語の中にもサンスクリット語からタミル語への借用語がみられることを指摘した。さらに、大野教授が引用した『タミル語大辞典』についても、その意味が古いものから新しいものへと並んでいるにもかかわらず、意味をアトランダムに選んで、日本語と対応させていることなど、多くの疑問点を指摘した。

シンポジウム参加者の一通りの発表が終わった後、これまでの家本・児玉・山下各氏の発表に対し、大野教授が反論を行った。まず相違点について、日本語とタミル語がそれぞれ異なった歴史を持つ以上、相違点があるのはあたりまえであって、相違点を問題にしてもはじまらないし、500の対応語こそが同系語の証拠となるのだから、そちらを問題とすべきであると述べ、相違点はまったく問題にならないことを強調した。しかし、この大野教授の反論ははからずも自己矛盾を呈すこととなった。というのは、大野教授自身が日本語とタミル語の相違を問題として、その解決策を提示しているからである。たとえば、タミル語には反り舌音(t , ɳ , r , l)を持つが日本語にはないことを、基層言語の影響で説明している(『日本語の起源 新版』215—219頁)。また、家本氏が指摘した相違点の中には、大野教授が定義をあたえることなく、タミル語と日本語が同じ概念とみなして使っている「助詞」に関するものも含まれており、相違点があってあたりまえという説明には正直いってがっかりさせられた。

さらに、児玉氏の指摘に対する反論はいつそうがっかりさせられるものであった。児玉氏がうえに述べた融合か、分裂か、またどのような音変化が起きたのかについて、大野教授に説明を求めたのに対し、おおむね次のように述べた。あなたのいっていることはよくわからないし、音対応を提示してあるのだから、それを問題にしてほしいと。もしこのことばにいつわりがないのなら、大野教授は比較言語学を知らないといってよいし、わかったうえで、知らぬ存ぜぬをきめこんでいるとしたら、こうした討論をする意味はほとんどない。融合や分裂について、大野教授の説明が待たれるところである。

大野教授が比較的好意的に答えたのは、山下氏の指摘に対してである。大野説のなかで中心をなす、日本語の助詞と対応するとみなすタミル語の例への山下氏の疑問に答えて、たしかに大野教授のタミル語インフォーマントもすべてに同意していないことを大野教授自身が認めたのである。シンポジウム参加者が指摘した疑問点に対する、大野教授の唯一の譲歩がこの一点であった。しかし、山下氏の疑問にすべて答えたわけではなく、サンスクリット語の借用語を対応表に入れたことに対しては大野教授なりの判断があるとだけ述べるにとどま

った。

全体として、大野教授が終始強調したのはつぎの点である。日本語と500以上の対応語が存在する言語はタミル語以外にないこと、そしてこの対応例をたてに、言語学が独立した経験科学として存在する以上、その言語学が出した結論はたとえ考古学や形質人類学が反証を提示してもほとんど意味がないこと、の二点に集約できる。これに対し、まず第一については長田がこの序の Appendix で若干の問題点をとりあげ、また山下氏にも対応語の問題となる例を積極的にとりあげてもらった。また第二については、たしかにわれわれが学生に対して説くのは言語学の自立性である。しかし、こうした自立性を比較言語学の立場で堅持しようとするならば、身体部位名など文化や自然環境の影響を受けにくい語彙を選んで対応語を提示するのが常識である。しかし、大野教授のとりあげる墓制や稲作、金属器、機織などは言語学の問題ではなく、むしろ大野教授が否定する考古学の分野の問題である。とすると、大野教授の考古学の反証は意味がないという言動は自己矛盾以外のなにものでもないというのは言い過ぎであろうか。

以上、シンポジウムを簡単に振り返りながら、大野教授の反論への問題点を指摘した。本来、シンポジウムで大野教授の反論の自己矛盾を追及すべきであったが、大野教授に「そんないいかげんな気持ちでやっていない」と、御高齢にもかかわらず、迫力のあることばで否定されたので、御高名な学者にあまり失礼なことをもうしあげにくくなってしまったということを、弁解として述べておきたい。そのため冒頭でも触れたように、シンポジウムは大野教授の一方的な勝利で終わったが、あの場面ではそれが最善であったといまでも信じている。

さいごに、この小特集の構成を述べておきたい。この0。序に続いて、シンポジウムの発言順に1。家本論文、2。児玉論文、3。山下論文を掲載し、最後にシンポジウムでは直接とりあげなかった考古学などの問題を視野にいれた4。長田論文で締めくくる。この序と山下論文以外の論文はすでにシンポジウムのときに用意されていたが、シンポジウムの後、若干書き改めていただいた。この小特集が、最近あまりとりあげられることがなくなった日本語の起源問題に対する関心と呼ぶ契機となってくれることを祈って、この序を終えたい。

(謝辞) このシンポジウムに参加してくださった皆さん、とくに参加を快諾してくださった大野晋学習院大学名誉教授、またシンポジウムの司会を務めてくださった山折哲雄国際日本文化研究センター教授に謝辞を述べておきたい。また、このシンポジウムは文部省特定研究「日本文化のセルフイメージの動態に関する研究」の一環として行われたことを付記し、便宜を計ってくださった研究代表者芳賀徹国際日本文化研究センター教授と鈴木貞美国際日本文化研究センター助教授に感謝の意を表したい。

Appendix

シンポジウム開催にあたって、大野教授は「タミル語：日本語対応語一覧」を発表者にはあらかじめ配布し、出席者にも参考資料として配布した。その対応語一覧が大野教授のタミル語＝日本語同系説の柱となっているので、ここに問題点をあげておく。

対応語一覧にあげられた対応例	556
そのうち重複例	87
タミル語のうち Tamil Lexicon (TL) を使用した例	38
日本語のうち方言を使用した例	64
タミル語以外のドラヴィダ語を使用した例	13

大野教授にはこの対応語例を選んだ正当な理由があり、細かいところまで論じると、水かけ論になりかねないので、客観的と思われる事実のみをあげておく。うへの表にあげたのはそれぞれつぎのような問題が生じてくるケースとしてあげた。

- (1) 大野教授は500以上の対応語というが、実際には重複するケースが多い。
- (2) TL から引用した語はサンスクリット語からの借用語が多い。
- (3) 日本語の方言の例はそれが日本語に古くからあったと確認できていない例である。

なお、大野教授は方言と断わらなかったが、fog-o (sack) (ほご) (5 頁) と kor-o (young beast) (小さい動物) (7 頁) は『小学館日本語大辞典』によると方言例である。

- (4) 大野教授はドラヴィダ語が問題ではなく、タミル語が問題であるときりかえし述べてきているが、対応語例のなかにはタミル語が登場しないケースが13例あった。

この表にあげた以外にもいくつかの疑問点が浮かんでくる。たとえば、大野教授は厳密な意味の対応を問題にされているが、引用した辞典にはない意味が用いられているケースが結構ある。そのいくつかをあげておく。

- (5) ドラヴィダ語語源辞典 (第二版) (DEDR) を多く引用しているが、DEDR の意味と異なった意味を対応例としてあげたケース。DEDR の番号、タミル語、大野教授があげた意味 (括弧にくくった英語)、DEDR に載っている意味 (等号記号の後の英語) の順であげる。ただし、ここにあげた例だけではなく、細かくみると、もっと多くなり、あくまでも筆者がざっと目をとおして気がついた例だけをあげた。

4452 pokkaṇai (hole, grave) = hole in a tree, stone or ground, cleft in rock.

4491 poṭṭu (mark on the forehead) = chaff, husk of grain, dust.

1311 kalai (to chase) = to disperse, be scattered, be ruined, water in thought, be blurred, to break up, scatter, detach, exile, frustrate, erase.

1325 kavara (branch of a river) = to separate, to branch off, fork, bifurcated branch (as of tree or river), prong.

3036 taṭṭu (mat to sit on) = screen folded or plain.

3047 taṇi (to be satisfied) = to abound, be profuse, increase in size, grow fat.

- (6) 直接引用しているわけではないが、大野教授が編者となっている『岩波古語辞典』と矛盾するケースがいくつかある。DEDR の番号、タミル語の語形と意味 (括弧内の英語)、日本語の語形と意味 (括弧内の英語) の順であげる。また、説明では『岩波古語辞典』の項目を「 」でくくり、『岩波古語辞典』の説明や意味を《 》でくくった。

170 am-ai (bamboo) **ama-fako** (box of bamboo)

「あまはこ」をみると、《海人が持つ箱の意》とあり、**ama-** は海人をさし、竹の意味はない。

4586 **pōtt-u** (male of birds) **fot-u** (male of birds)

「ほつ」は辞典項目にはなく、「ほつたか（秀つ鷹）」があり、すぐれた鷹を意味する。**fotu** に、雄鳥の意味はない。

4587 **pōtt-u** (young twig) **fot-u** (young branch)

「ほつ」は辞典項目にはなく、「ほつえ（上枝）」があり、《ホは突き出ているの意。ツは連体助詞》とある。**fotu** に若木の意味はない。

1109 **kat-ai** (gate) **kad-o** (gate)

「かど」をみると、《カはスミカ、アリカのカ。ドは戸口の戸》とある。この分析が正しいとすると、上の対応をどうみるのか。

3949 **par-avai** (ocean) **(una)-fara** (ocean)

「うなばら」をみると、《ハラは広く平らな面の意》とあり、**fara** には海の意味はない。

5159 **yāru** (river) **yar-a** (river, brook)

「やら」をみると、《ヤは沼沢の意。ラは接尾辞か》とあり、意味は沼地であって、川の意味はない。

5352 **vāy** (word) **fa** (word)

「ことば」をみると、《語源はコト（言）ハ（端）。コトのすべてではなく、ほんの端にすぎないもの》とある。**fa** が (word) を意味しない。

その他、上代日本語までさかのぼれない日本語の語例はすでに故村山七郎教授などがあげているが、網羅的に個々の対応語を批判するには筆者の勉強不足もあり、ここではこれぐらいにしておきたい。大野教授が500以上の対応語といって豪語するにはいささかところもとない対応語であることだけは指摘できたのではなかろうか。